

二〇〇二年度

早稲田大学博士學位論文概要書

藤巻和宏



二〇〇二年度 早稲田大学博士學位論文 概要書

長谷寺縁起の形成と展開

杉野服飾大学非常勤講師 藤巻和宏

本研究は序章と十三章の本論、そして資料編に大別され、本論は内容面から五部に分けてある。なお、混同を避けるため、部数は第Ⅰ部、第Ⅱ部…とローマ数字にて表記し、章は漢数字で記す。

序章 長谷寺縁起研究の課題と展望

長谷寺縁起の研究史を概観し、問題点を指摘する。そのうえで研究の展望を示し、本研究の方向性と意義を説明する。即ち、長谷寺縁起類の再生産と変容の様相を探るには、まずは個々の縁起の位置付けを明らかにする必要がある、また、歴史的・思想的な背景や説話世界への目配りも重要であるということである。

縁起の展開を論ずるための指標として、筆者は『長谷寺縁起文』『長谷寺密奏記』の両書を据え、東密・修験・両部神道等の思想的背景より構築された理論が、縁起の展開を導く原動力のひとつとなったことを明らかにしてゆきたいと考える。と同時に、こうした視点からのアプローチは成立年代を論ずるための試みともなりうるのである。

第Ⅰ部 長谷寺縁起の展開

第一章 長谷寺縁起の展開

『長谷寺縁起文』成立以前の長谷寺縁起類のヴァリエーションを紹介し、長谷寺の開基を道明とするか、徳道とするかという矛盾が止揚されてゆく様を跡付けつつ、展開の様相を概観する。

そのような『長谷寺縁起文』成立前史とでもいうべき状況を押さえたうえで、本研究の中心課題である『長谷

寺縁起文』、およびそれを本地垂迹説の立場から裏付ける役割を果たす『長谷寺密奏記』について解説を加え、第Ⅱ部以降の論の前提とすべく、その内容を紹介する。

第二章 長谷寺縁起と南都系縁起集

『長谷寺縁起文』成立前史の中でもとりわけ重要な位置にある護国寺本『諸寺縁起集』所収縁起について扱う。この縁起の登場により、それまでの長谷寺縁起類の諸説が整理され、『長谷寺縁起文』として結実する素地が作られたといつてよい。前章で触れた長谷寺開基を誰とするかという矛盾に加え、創建・供養の年代に関する齟齬も目立つのであるが、これらの点を是正しつつ、縁起の展開を次の段階（『縁起文』）へと導くこととなった護国寺本の位置付けは甚だ重要であると言えよう。

また、この縁起は、『建久御巡礼記』『諸寺建立次第』所収縁起等と併せて「南都系長谷寺縁起」と一括することができる。現存する文献から遡り、その背後に展開していた諸言説の存在をも意識しつつ、『長谷寺縁起文』成立に際しての南都系縁起が果たした役割を指摘する。これは、長谷寺と南都、特に興福寺との関係を考える際にも無視することのできない問題である。

第三章 『長谷寺験記』の成立年代・再考

『長谷寺験記』は、『長谷寺縁起文』と『長谷寺密奏記』とから抄出・再構成された縁起譚を序文に持ち、また本編も両書からの影響が濃厚である。

この『長谷寺験記』の成立年代は、永井義憲氏による十三世紀初期説が定説となっているが、これを信ずるならば、『長谷寺縁起文』『長谷寺密奏記』は十三世紀初期以前（おそらくは十二世紀）の成立ということになるが、筆者は様々な点から十三世紀後期まで降ると考える。その根拠については第Ⅱ部以降、随所で触れることに

なるが、ここではその前提として、永井氏の『長谷寺験記』成立年代説を再考する。永井氏説の根拠の中心は、五度の長谷寺炎上を記す巻上・第十話が六度目の火災に触れていないことであるが、この説話それ自体と、『長谷寺験記』全体の編集方針とは、別個の問題として扱うべき事柄である。

第Ⅱ部 伊勢・春日・東大寺と長谷寺縁起

第一章 長谷寺縁起と天照大神・春日明神・第六天魔王

阿部泰郎氏により表裏一体となつて機能すると指摘された『長谷寺縁起文』『長谷寺密奏記』であるが、これらが具体的にどう機能しているのかを探りつつ、両書の指向するものを考える。即ち、両書を併せ読むことにより、国家や藤原氏——それは神々（天照大神・春日明神）や靈地（伊勢・春日）とも言い換えることができる——と長谷寺との繋がりが明らかにになり、それによつて、従来の縁起では達成しえなかった高みへと長谷寺を押し上げることができるのである。また一方で、永井義憲氏が後世の加筆と見る要素（第六天魔王等）が『長谷寺縁起文』の中で有機的に機能していることより、成立当初からテクストの中に組み込まれていたこと、即ち、成立年代は十三世紀まで降る可能性が高いということをも示唆する。

第二章 長谷寺縁起と東大寺四聖伝承

前章とは別の視点から、やはり両書は一对のものとして機能しつつ、国家・神仏・靈地との連繫を指向していることを示す。具体的には、東大寺のイメージを襲いつつ、伊勢との繋がりを求めていることを、東大寺再建に際して語られた行基・橘諸兄の伊勢参宮譚（東大寺大仏建立の可否を天照大神に尋ねるといふもの）によつて明

らかにすることができるといふものである。また、長谷寺開基の徳道に修験者のイメージが付与されているが、これは『長谷寺縁起文』『長谷寺密奏記』の成立基盤を考える際に、東密や両部神道と並んで注目すべき点であり、一方では、第IV部第二章で論ずる瀧蔵権現の問題とも関わるのである。

第Ⅲ部 室生の如意宝珠と長谷寺縁起

第一章 長谷寺縁起とㇿ一山の如意宝珠

『長谷寺縁起文』で語られる観音台座願現譚の成立背景として、『ㇿ一山秘密記』に代表される室生の如意宝珠をめぐる秘事口伝の世界を想定し、そこから長谷寺と室生寺との繋がりのみならず、東密（特に三宝院流）や両部神道との密接な関わりを明らかにしてゆく。

また、「縁起」という形で偶然に残りえたテキストだけを考察対象とし、テキストとテキストとの突き合わせという作業を行っていただけでは何も見えてはこないということを実例を挙げて示す。雑多な口伝類をも含む現存文献から遡り、その背後に展開していたであろう言説群をも視野に入れて考察することが重要なのである。

第二章 如意宝珠をめぐる東密系口伝とㇿ一山縁起

前章で扱った問題の輪郭をより正確に把握すべく、いったん長谷寺縁起から離れて東密三宝院流における宝珠や舍利に関する秘説の形成を探り、数種のㇿ一山縁起テキストの背後に横たわる膨大な言説や宗教儀礼の世界を確認する。空海に仮託される『遺告二十五箇条』に記されたㇿ一山の宝珠が、後世、様々に解釈され、諸説が生まれたのであるが、それらの説を利用することによって、真言寺院としての室生寺の「縁起」を語るテキストが

作られたのである。『縁起文』『密奏記』と関わりの深い一山縁起類の生成の背景を確認することは、本研究に不可欠の課題である。

第三章 三宝院流口伝と三尊合行法

前章を補完すべく、三宝院流の中でも秘法に属する修法である三尊合行法について考察する。一山の如意宝珠は三宝院流最大の秘法・三尊合行法と観念されることから、『遺告二十五箇条』の段階から内包されていた矛盾を合理的に解釈することができる。

また、こうした一連の作業は、今後、長谷寺縁起研究にも還元してゆかなければならないと考える。即ち、現存文献同士の突き合わせだけでは全く見えてこなかった世界の存在を念頭に置きつつ、長谷寺縁起形成に大きく関わった一山をめぐる秘事口伝類を読み解くことの必要性が確認できるのである。

第Ⅳ部 長谷寺の神々

第一章 初瀬鎮座神の成立と伊勢神道説

『長谷寺縁起文』の神祇編たる『長谷寺密奏記』は、神々との関わりを求めるという目的で作られたテキストであろうと考えられる。その成立の前提として、初瀬の地には多くの神々が鎮座すると観念されていたはずであり、『密奏記』はそのような思想的土壌から生まれたものと思われる。

時代が降り、種々の信仰が成長発展してゆくにつれ、初瀬の地に鎮座する神はその数を増してゆく。そうなる、神祇編一編だけでは対応できなくなり、『裏付』として初瀬に鎮座する神々の一覧が作られた。その中心と

なる五神は初瀬鎮座神体系の中心をなすものであり、伊勢神道説に由来するものの、独自の解釈を施され初瀬の神と観念されるに至ったのであった。『裏付』には他の十六神の鎮座や鳥居の縁起なども記されており、さらに検討を加える必要があるが、少なくとも『裏付』の追記という事実からは、権威あるものとの連繫を求めることにより長谷寺の靈威を増そうとする動きの反映が読み取れるだろう。

第二章 瀧藏権現の神格をめぐって

長谷寺の北方約五キロメートルに鎮座する瀧藏権現は旧地主神であり、その座を北野天神に譲り渡し（今の与喜天神）、遠方に退いたと伝えられる。この神は様々な観念されていたとおぼしく、複数の神格が重層している。その中で特に注意されるのは女神としての神格であり、『験記』に収録される信濃長谷寺縁起の検討から、初瀬五神の一角をなす豊秋津姫がその本来の姿だったのではないかと推測される。『裏付』に、手力雄とともに鳥居の脇に鎮座すると記された豊秋津姫は、信濃長谷寺縁起では、童子を連れた女人の姿で白介翁（信濃長谷寺開基）の前に現れるのである。童子は長谷山口社の神であると明言されており、女人と童子は豊秋津姫・手力雄に置き換えることができる。それはつまり、『長谷寺密奏記』の信濃長谷寺ヴァージョンにほかならず、瀧藏権現が豊秋津姫と認識されていたことが見て取れるのである。

瀧藏権現は、また一方では修験の神としての性格をも兼ね備えており、『縁起文』『密奏記』の修験的要素を考えるに際し、甚だ重要な存在である。その他、多方面からの考察が必要となろう。

第三章 散佚書をめぐる問題

『長谷寺縁起文』『長谷寺密奏記』『長谷寺験記』に引かれながら現在は伝わらない散佚書について考察する。散佚書『長谷寺流記』をめぐる考察がすでに野口博久・永井義憲両氏によってなされているが、筆者は用例の

検討から、「流記」とは特定の一テキストを指すのではなく、「縁起」や「旧記」「古記」などの如く普通名詞と捉えるべきものであると考える。この流記の中には神仏をめぐる諸記録も含まれており、『行基菩薩国符記』や『行仁上人記』とともに、『縁起文』『密奏記』『験記』に材料を豊富に提供している。

一方、『行基菩薩国符記』と『行仁上人記』は、引用箇所を検討より、ともに初瀬の神仏をめぐる様々な記録の集成であることが出来る。行基は、兩部神道書の『大和葛城宝山記』の作者に仮託されており、当時、〈行基〉によって語られる神々（あるいは神仏）の世界があつたということが推測される。とすれば、長谷寺の勅進聖として名を馳せた行仁に、神仏の世界を語る役が負わされたのは、勅進聖の祖とでもいふべき行基像からの連想で、第二の行基と目されたがゆえではなからうか。

第V部 その後の長谷寺縁起

第一章 後世への影響と縁起の変容

『長谷寺縁起文』『長谷寺密奏記』、そして『長谷寺験記』成立以後の長谷寺縁起の展開について述べる。

まず、遠日出典氏が「古縁起」の系統に分類する『阿婆縛抄』『帝王編年記』所収縁起の検討から、遠氏の「新縁起／古縁起」という二分法が妥当な分類法とはなりえないことを明らかにする。また、『縁起文』の影響下にはない縁起も存在するものの、やはり根本縁起と位置付けられた『縁起文』の後世への影響力は絶大であり、縁起絵や略縁起の多くは『縁起文』を範として作られたのであるということを示す。

さらには新長谷寺や縁起と取り紛れやすい表題を有する文献も、総合的な視点での長谷寺縁起研究を行う際に念頭に置かなければならないと指摘する。

第二章 縁起の書写と享受

最後に、縁起の“その後”を考える際のもう一つの視点として、および、長谷寺縁起研究の一応のまとめという意味をも込めつつ、『長谷寺縁起文』『長谷寺密奏記』『長谷寺験記』の伝本レヴェルでの書写と享受について考察する。なお、特殊な享受圏を持つ『密奏記』は、伝本の大きくに種々の注記が付されている。これらの注記を詳しく検討することにより、テクストの書写に伴い様々な長谷寺をめぐる言説が新生してゆく様を確認することもできるのである。

資料編

本研究の基礎資料の紹介という意味をも兼ねて、資料一として『長谷寺密奏記』の最古の伝本である金沢文庫蔵『〔長谷寺司等謹勘言上〕』の翻刻と訓読を、また、資料二として『山一山秘密記』の最古の伝本である随心院蔵『山一山秘密記』の翻刻と訓読を行った。